

図書館員の文献紹介と資料の活用

本学図書館のスペシャル・コレクションより (44)
末松謙澄が『源氏物語』を英訳した話
————— 奥 正敬 30~32

シリーズパソコン周辺機器 ③⑤
「JAIRO Cloud」————— 宮杉 浩 33

名作再読、拾い読み (34)
『ワインズバーグ・オハイオ』 [1]
 (“Winesburg, Ohio”)
————— 小澤文彦 34

おこしやす、図書館へ
「言語学、はじめの一步 (26)」
————— 入学直哉、藤井達也 35

日本の歴史45
『日本は外国人にどう見られていたか』
————— 稲垣宏行 36

ILL業務に携わる日々 —— 戸田奈緒子 37

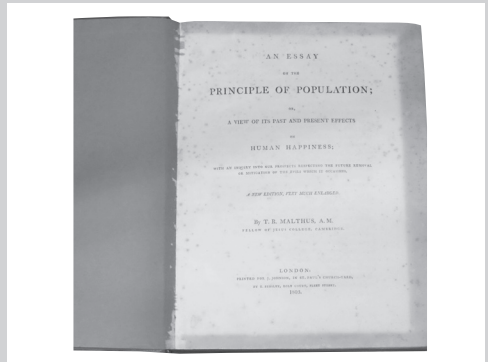
Book Review Corner ————— 38・39

図書館利用案内

ライブラリー・カレンダー 2016 (1月~3月)
————— 40

●表紙で紹介する貴重書

マルサス生誕250年を記念して



MALTHUS, Thomas Robert
An essay on the principle of population
London, 1803.
マルサス『人口論』

今年はいギリスの経済学者トマス・ロバート・マルサス (1766-1834) の生誕250年にあたります。

彼はロンドンの南にあるサリー州ドーキングで生まれ、1784年ケンブリッジ大学ジーザス・カレッジに入学した。卒業後は家に近いオールベリーで牧師補を務め、その後ジーザス・カレッジのフェローに選出された。

丁度その頃はフランス革命の影響を受けてゴドウィンやコンドルセといった急進思想家がもてはやされていて、マルサスは時事問題について父とよく討論した。父とは逆に新思想に反対する立場をとり、この討論を契機として著したのが『人口論』初版 (1798年) である。

この中で、人口は人間の本能である性欲により幾何級数的に増加するのに対して、食糧は算術級数的にしか増加しないこと、そのため、自然の状態では過剰人口による食糧不足は不可避であり、このことから貧困は死亡率を高める積極的要因、悪徳は出生率を低める予防的要因となるので、過剰人口の抑止力として是認されることを述べた。これは貧困問題の解決策や貧民救済策が無意味であることを意味しており、ゴドウィンたちが提唱する理性の支配する理想社会は実現しえないことを主張するものであった。

この『人口論』は、最後に第6版が出されるまで度々改版されたが、1803年に刊行された第2版である本書と初版の間には、著しい相違点が存在する。即ち、語数約5万語の初版では、人口増加を抑制する要因として、必然的に生ずるとされた貧困及び悪徳のみを認識したのに対し、約20万語の膨大な著作となった第2版以降においては、新たに道徳的抑制の存在を認めている。この著作は人口論の独立した最初の体系的著作であり、「人口問題に関するあらゆる近代的思索の出発点」となった。